

かえ もの みち どう よわ もの みち よう  
反る者は道の動なり。弱き者は道の用なり。  
てんか ばんぶつ ゆう しょう ゆう ぶ しょう  
天下の万物は有より生じ、有は無より生ず。  
みち いっ しょう いっ に しょう さん しょう さん ばんぶつ しょう  
道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生  
ず。万物は陰を負いて陽を抱き、沖氣以て和を為す。

【大体の意味内容】前進するということよりも、反復することが道の「動」である。剛強であるよりも、柔弱であることが、道の「用」すなわちなやかで豊かな働きである。天下の万物は、「有」つまり実際に存在する女性的なものから生まれてくる。しかしその女性的な「有」は、目には見えず、音に聞こえず、味においても感触も得られない、「無」の世界から生じる。「無」とは単に空虚なのではなく、我々人間の能力ではとらえられないレベルにあつて、しかも万有の根本道理という、「道」なのである。

「道」は始原としての「一」を生み出し、「二」は「二元」的なものを派生させる。天地初発て、その間に「人」的生命遊動体が生成する。そうして、天・地・人の「三才」が連関協働して、万物が生み成される。万物は太陰の神性を背に負い、太陽の神性を胸に抱く。万物には、大きなものでも小さなものでも、その内奥から湧き出る「沖氣」というものがあつて、陰陽二神のエネルギーを調和させる。

「この素読を始めた最初のこと」

「天地は日月の魂魄なり。人の魂魄は日月二神の靈性なり」という、室町時代の神道家吉田兼俱の文章をみんなで読んだことがあります。「天は日神と月神の魂である。いいかえれば『太陽』と『太陰』のエッセンスだ。大地はその太陽と太陰が結晶して形を成したものだ。そして人の魂や肉体は、太陽太陰の調和したものだ」といった内容でした。その着想に学生時代、たいそう感動した

ものでしたが、吉田兼恒の思想は、いこのき子の「万物は陰を負って陽を抱き、沖氣<sup>いけいき</sup>以て和を為<sup>な</sup>す」の影響を受けたものだったのだ、とわかりました。

私たちの心身は、宇宙の二つの極、太陽と太陰がギュッと凝縮してできている。

一人一人の身体が皆、そういう小宇宙なんだよ。

小さな小さな「私」だけれど、巨きな大きな「大宇宙」と、直接つながっているんだよ。

胎児<sup>たうじ</sup>と母体が繋が<sup>な</sup>って交流しているよしい。

そういわれているよんな感じがします。

始めのほうで「弱き者は道用のための」とあり、続けて「よきの生ずるよしの話が連続して語られるおの、すべしは」兼弱で母性的なものが、かゝる生れわけていられるわけですよ。

こちら力の強いものが多くを支配しているよしいことも、「母なるもの」が減らなければ自分たちも滅び、宇宙そのものも滅ぶわけですよ。

宇宙は種々あるものであります。私たちが自身で宇宙はあります。

私たちが自身の意識や意思のその奥深遠なところ、山、川、海、とかのよんな、目には見えなから深遠なところから発せられる「沖氣<sup>いけいき</sup>」が、宇宙の意識であり、私たちのよんなよしの本心なのであります。

そなたを愛し取りなすよしいよいられたらよいと思えます。